

浴衣着付け体験

～日本の文化 和服の入門として～

桐生市立中央中学校

1 はじめに

平成24年より改訂された新学習指導要領では、技術・家庭科の学習内容【衣生活・住生活と自立】の中で、浴衣など和服について調べたり着用したりするなどして、和服と洋服の構成や着方の違いに気づかせたり、衣文化に関心をもたせたりするなどを扱う単元が新しく導入された。これまでは和服の文化について学習する機会がほとんどなかったが、教科書で取り上げられたことにより、和服と洋服の違いなどを学ぶ単元を通して日本の伝統文化である和服に対し少し関心を示すようになった。その学習の中で、数人の生徒に浴衣を着せてみたところ大変興味を示し、「浴衣のままその後の授業を受けたい。」という生徒や、「正しい帯の締め方を教えてほしい。」という生徒が多くいた。そこで今回、和服の入門として比較的着付けが簡単な浴衣の着付けを体験する授業を実施した。かつては京都西陣と並び称された「織物の街」桐生への愛着を深める機会になればと考えた。

2 概要

桐生織物協同組合の協力を得て、装道礼法きもの学院の金子先生のご指導の下、浴衣の着付け体験を実施することになった。夏祭り前に体験すれば、地元の桐生祭りに浴衣で出かけてみたいと思う生徒や自分で帯を締めてみたいと思う生徒もいるだろうと想定し、夏祭り直前の7月13日に実施した。実施学年は2学年。4クラスで、在籍生徒数は各クラス32人ずつ。

汗をかく時期であり、浴衣を広げるスペースの関係で実施場所はカーペット敷きでエアコンが使える器楽室で行った。時間表を入れ替えてもらい、2クラス合同で、2時間連続の授業とした。



【授業前の着付けセット】

3 活動の様子

(1) 男女別に15名程度ずつ分かれ、それぞれ2名の講師の先生から説明を受ける。男性



【講師の説明後、やってみる】

用浴衣は中央中学校にあるものを使用する。女性用浴衣は講師の先生方が持ち寄ってくださった。帯も腰紐も補正用のタオルの準備もしてくださった。右上写真のように色々な柄の浴衣があり、選ぶ段階から楽しい時間であった。

まず一人の生徒をモデルに着付けの流れを説明したあと一人一人着付けていった。女子は帯が余分に用意されていたので待ち時間中に帯だけで締める練習をする生徒が多くいた。

また女子の方が使う紐が多く、「お端折^{おはしより}り」という独特の着付け方があり、体補正用のタオルを使うなど、着付けの過程が少し複雑なのでスムーズに着られないようだった。男子の方が帯の締め方がやや平易なので、どうにか自分一人で締められる生徒が多くいた。一度締めてからほども、また締めるを繰り返して完全にマスターしようと意欲的に取り組む生徒も多かった。友達同士で教え合ったりする場面も多く見られた。【互いに教え合う男子】



(2)



【作法についてお話を聞く】

浴衣を着て、正座をして、作法についてのご指導も受けることができた。体育着と違って手の置き方なども意識することができた。学校の浴衣を借りるのが前提であったが、家に浴衣がある生徒には持ってきてよいことを伝えておくと、各クラス2名～3名程度の女生徒が自分の浴衣を持参してきた。借りて着るよりも一段と嬉しそうに着付けていた。また、選ぶ浴衣の絵柄にも個性が表れていた。



【家から持ってきた自分の浴衣】



【着付けが終わった女子一同】

4 おわりに

日本の代表的な文化である着物は、日常生活ではなかなか触れることができないのが現状である。「織物の街」として桐生を語ることは多いけれども、生徒たちがそれを実感できる場面はほとんどなかった。先に述べたように、新指導要領の改定がきっかけとなって教科書で取り上げられたことは大きな力になったように思う。また今回、桐生織物協同組合のご協力が得られたことは大変心強かった。そして装道礼法きもの学院の先生方にも丁寧な指導をしていただき、生徒たちが一人残らず全員着付けることができ、生徒達にとって貴重な授業体験をさせていただいた。数人の生徒に代表として着てもらうのでは着物への関心もあまり高まらないが、全員が浴衣を着てみたことで和服の文化への関心も一段と深まっていったと思う。「西の京都、東の桐生」といわれていることも実際に手で触れて少しは実感できたのかと思う。自分たちの住む地域の良さに気づき、地域に誇りをもつきっかけになったと考えている。